

### 〔3〕 生徒の実態及び個人目標（生活全般、からだ）の設定

#### (1) 基礎調査に見る実態

○学年別知能段階の分布

	学年	段階				計
		重 度 ( ~ 35 )	中 度 ( 35 ~ 50 )	軽 度 ( 50 ~ 75 )	境界線 ( 75 ~ )	
高 等 部	1	2	5	3	・	10
	2	・	3	2	2	7
	3	2	5	2	1	10
	計	4	13	7	3	27

○主な重複障害（延数）（高等部）

障害	ダウン 症	言語 障害	情緒 障害	自閉的 傾 向	てん かん	視覚 障害	運動機能 障 害	代謝 異常	その他（小頭症、ムコ多糖蓄積症 多動症候群、色覚障害、染色体異常、等）
人数	3	4	1	3	4	2	2	0	8

#### (2) 生活全般から見た生徒の実態

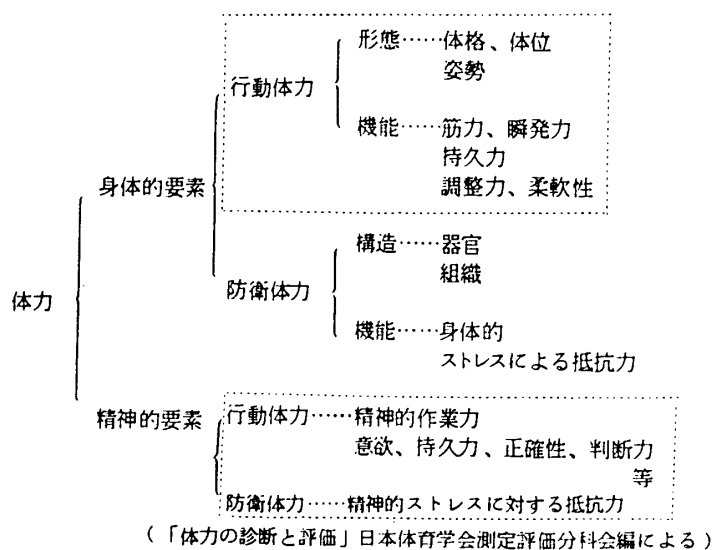
- ・見通しを持った行動ができず、言われてから行動する生徒が多い。
- ・意識をもって、力一杯、自分の力を発揮しようとする生徒が少ない。
- ・場に応じた言葉使いをしたり、行動したりすることができない。
- ・集中力に欠け、落ちつきがなく、自己抑制する力が低い。
- ・自信がなく、はきはきしない生徒が多い。
- ・素直で、純粋な心を持ち、感情が豊かである。
- ・友だちに対して、めんどう見のよい生徒が多い。等

#### (3) からだに関わる生徒の実態

「からだ」に関わる生徒の実態として、ここでは右の表Ⅰの示すとおり、「体力」の構成要因の中の「行動体力」として示される部分で、主に①体格・体位に関わる実態、②運動能力、体力に関わる実態、③意欲、態度に関わる実態の3つにしぼって記すこととする。

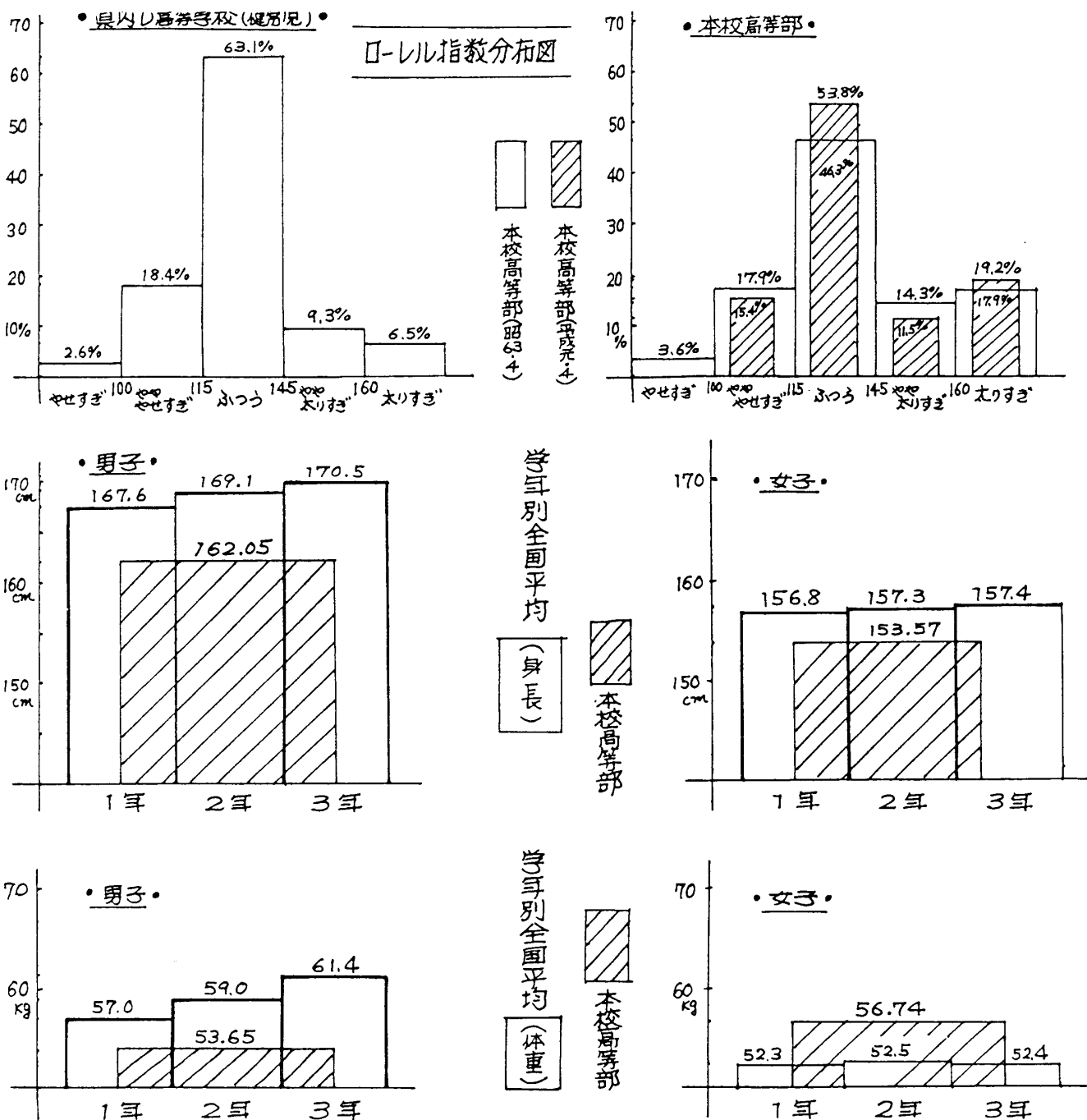
尚、本校高等部における「健康」及び「体力」のとらえ方は、P97の昨年度の取り組みの中で述べている。

表Ⅰ 体力の構成要因



① 体格・体位の実態と特徴（問題点）

毎年度当初の身体測定（身長・体重・座高）とともに「体脂肪率」「ローレル指数」の値を求めた。また、昨年度協力を得て資料提供を受けた他の高校（健常児）の資料等と比較した結果は、次のような結果となっている。



これらの値や諸資料を比較、検討した結果、本校の生徒の体格・体位の特徴については、昨年

度の報告（研究紀要第10集）で指摘した次の傾向や問題点と大きな差位は認められない。

㊦ 身長・体重の関係からみて肥満傾向にある生徒が、他校（健常児）に比べてかなり多い。  
特に、本年度のとりくみの成果として、全体重の中の脂肪の占める割合（体脂肪率）に改善がはかられつつある。

㊧ 身長に対して、下腿の筋肉は、ほぼバランスがとれているが、上肢の筋肉は大きく劣っている。特に、肥満傾向の一部の生徒を除いて、走る・歩くなど日常の生活に多く含まれる動きのもととなる下肢について、健常児に対してほとんど劣っていないことは、からだづくりを通して、運動能力の向上を期待できる生徒があることを示唆している。

なお、知恵おくれ肥満児の減量への取り組みについては、養護・訓練（課題別トレーニング）の項でのべるが、格別、肥満防止が重点課題となっている下表の四名の生徒のローレル指数・体脂肪率の変化は、次の通りとなっている。

		S 63. 4月	S 63. 10月	H 1. 4月	H 1. 9月
St・Y (1年)	ローレル指数	207	201	208	219
	体脂肪率%	53.1	41.3	43.7	38.2
Sk・Y (1年)	ローレル指数	223	234	234	225
	体脂肪率%	36.5	39.2	44.1	39.2
H・O (1年)	ローレル指数			176	179
	体脂肪率%			43.1	41.0
K・I (2年)	ローレル指数	188	190	184	182
	体脂肪率%	48.6	51.5	48.7	43.7

㊨ 体力診断・運動能力テストによる生徒の実態

身体的要素の中の「行動体力」の機能における各要因（筋力、瞬発力、持久力、調整力、柔軟性等）は、一般に体力診断テストや運動能力テストで測定され、評価されることが多い。

そこで、生徒の実態として、まず体力の要因別に観点を分け、体力診断テスト（握力、背筋力垂直跳、踏み台昇降、反復横とび、立位体前屈、伏臥上体そらし）、及び運動能力テスト（50m走、ハンドボール投、立幅跳、持久走、斜め懸垂）を実施した。（P140参照）

体力の観点	筋力		持久力		調整力	柔軟性
	静的筋力	瞬発的筋力	全身持久力	筋持久力	敏捷性	
体力診断テスト	握力 背筋力	垂直跳	踏み台昇降 運動		反復横 とび	立位体前屈 伏臥上体そ らし
運動能力テスト		50m走、ボール投、立幅跳	持久走(1,500m又1,000m)	斜め懸垂		

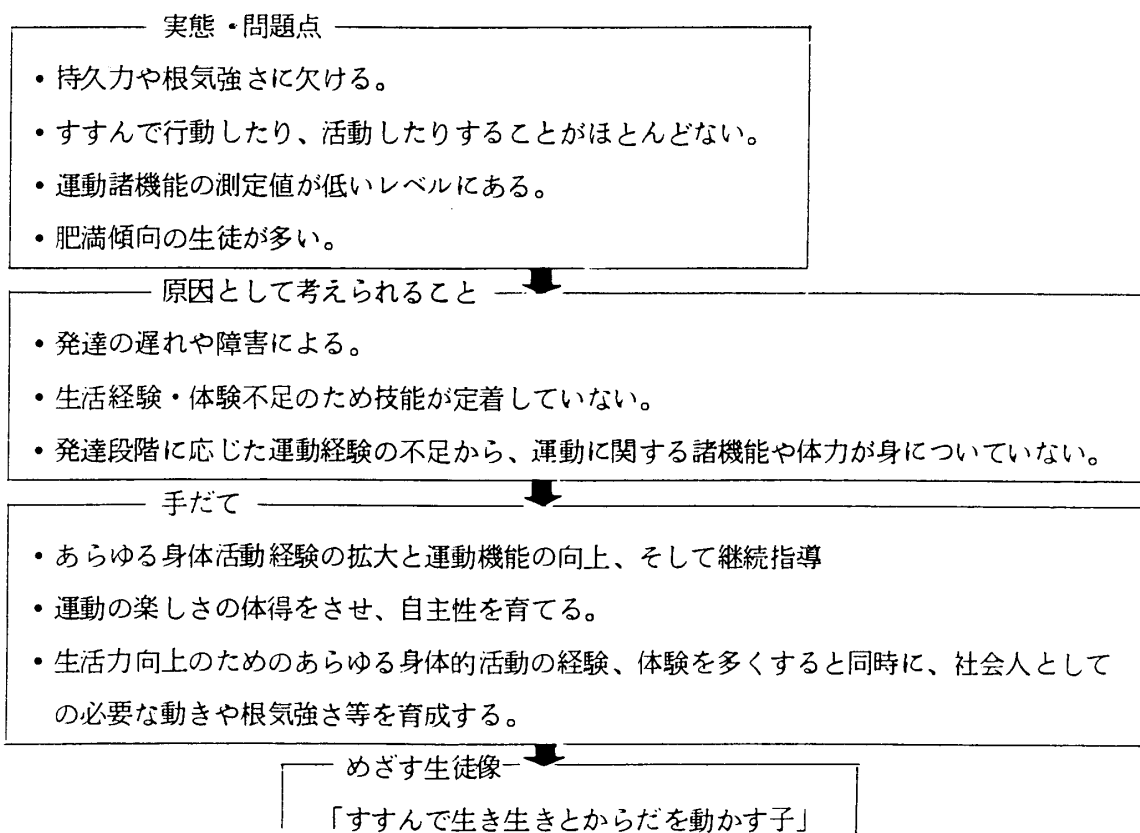
実態として、種目によっては健常児の平均に近い生徒から、力は持っていても測定の仕方が理解できず、測定不能となってしまう生徒等個人差が非常に大きい。全般にどの能力も大きく劣っているが、中でも特にハンドボール投げ、反復横とび等の協応動作や、敏捷性といった調整力、さらには、握力、背筋力、斜め懸垂といった筋力が劣っている傾向にあるようである。

### ③ 精神的要素における生徒の実態

- 持久力、根気強さに欠ける。
  - ・苦しくなるとすぐやめてしまおうとする生徒が多い。
  - ・学習、作業等でも集中する時間が短い。
- すすんで行動したり、活動したりすることがほとんどない。
  - ・指示がないと、何もせずにいることが多い。
  - ・やり方がわかっても、経験不足や自信がないため、すすんでやることができない。
- 見通しを持って行動したり、すばやく行動したりする意識が薄く、運動量が少ない。
  - ・学習や作業等ではじめから意欲的に取りくんだり、すすんでやろうとしたりする生徒が少ない。

### (4) まとめ

このように、生徒の実態、問題点から高学部研究テーマ〈すすんで生き生きとからだを動かす子〉をめざして、まとめると次のようになる。



この「すすんで生き生きとからだを動かす子」をめざして、次のように個人目標を設定した。

### (5) 個人目標(生活全般・からだ)の設定(P144参照)